

「て」による節の結合と「と」による 節の結合の異同について

— 継起・必然的な結果・発見・時の用法 —

江 田 すみれ

1 はじめに

日本語教育において学習者は一般的に節の接続形式として早い段階に「て」を使って複数の節を結合させることを学ぶ¹⁾。そして、「て」節（以後「て」節を「て」と省略する。同様に「と」節は「と」「たら」節は「たら」と表記する）は比較的無色透明な接続形式に見えるのであろう、学習者の文章を見ると、「～て、～て、～て～」のように他の接続形式を使わずに「て」だけで済ませて、「と」や「たら」「ので」など別の表現が使えていない例がよく見られる。学習者は「て」で文を接続している場合とほかの形式を使うべき場合とを認識する必要がある。このことは吉田（1994）金沢（2003）などで取り上げられているが、本稿でも同様に問題を整理したい。

金沢（2003）は「と」について、条件表現として分類するより、継起表現として分類し、「て」との対比を学習者に示した方が効果があると述べている（p.14）。

本稿は、学習者に「と」と「て」の使い分けを理解してもらうことを目指すものである。「て」と「と」の使い分けの条件を明確にしたいと考える。

2 先行研究

2.1 「と」と「て」の位置づけについて

吉田（1994）は台湾の4大学の75人の学生の564編の作文の「て」を含む文1611例を分析し、「て」と発見の「と」、原因・理由の「て」と「ので・から」の間違が多いと述べている。

×(1) 今の現象を見て、夫婦の関係にただふたつがあります。（発見）

×(2) 実はお見合いはおもしろくて、機会があつたらほんとに（結婚相手）見つけれるか、試してみよう。（原因・理由）

（例文1・2 吉田 下線、誤用の基準も吉田による）

金沢（2003）は日本語教科書、日本語文法の本での「と」の位置づけを調べ、日本語文法の参考書（益岡・田窪（1992）、森山（2000）、庵（2000））では「と」は「たら・なら・ば」と同様に条件表現の一つと整理されているとしている。また、日本語教科書は『みんなの日本語』『進学する人のための日本語初級』『日本語初歩』を調べ、「と」は前項と後項の間に「必然的・自動

的・自然な」関係が存在すると説明されていると述べている。

しかし、学習者の誤用例の実態は「と」と「て」の混同が多いとし、多くの誤用例をあげ、「と」を条件表現に含めるのではなく、継起の表現をになう形式と位置づけてはどうかと提案している。

×(3) 私が左側の翼のちょうど上の席に座って、隣の席に同じ大学から来た人がいました。(例文3・4金沢)

×(4) 帰ろうとしてもう一度桜を見て、その桜が私に手を振って別れを告げた。

筆者は金沢(2003)の「と」と「て」の位置づけの考えに賛同し、その性格の違いについて考えたいと思う。

一方、野田(2005)は無目的な文法ではなく、学習者のニーズに合わせた教育をするべきであるとして、学習者に必要な表現を選択して教え、時間をかけても学んでくれない項目は後回しにすることを提案している。具体的に言うと、条件表現は初級では「たら」を教え、それ以外の条件表現は後で教えるのがよいと述べている。

本稿がとりあげる「と」は後回し項目にあたるが、後回しはいつまでなのだろうか。後回しにすることは十分検討された判断なのだろうか。考えてみる必要がある。

2.2 「て」の用法、「と」の用法についての先行研究

松田(1984)は「と」「て」について以下のような基本的な意義があるとする。

「と」 前項の動作・作用や状態が完了・成立し、次に現れる後項の動作・作用や状態に連続していくが、前項と後項の動作・作用や状態の間には明確な切れ目が存在する。

「て」 前項と後項の表現する動作・作用や状態が互いに切れ目なく連続することを表す。

「て」の用法は以下のように分類している。

[1] 継起的な動作・作用

前項(以後Pと表す)後項(以後Qと表す)の主体が同一。述語はPQともに動作性。

「と」を使った場合より連続性が強い。

(5) 菊子は花を出して、水を捨てた。(例文5・6は松田)

(6) 菊子は花を出すと、水を捨てた。

[2] 付帯状況

Pの動作・作用が完了した後、結果の状態が残存すれば付帯状況となる。手段・方法の用法もある。

[3] 原因・理由

原因・理由の文ではQは非意志的なものである。

[4] 並列

並列用法はあるが、「て」はあまり並列とそぐわない。

一方「と」の意味は以下のようなものである。

一般的叙述は必然的な結果を表す。文末はル形である。

個別的な叙述は文末がタ形で用いられる。

〔1〕 継起的な動作・作用

PQの主体が同一の場合も別個の場合もある。PQともに動作性述語が使われる。

〔2〕 きっかけ

PとQの主体が別個。PQともに動作性述語が使われる。

〔3〕 発見 動作性述語＋状態性述語

〔4〕 時 状態性述語＋動作性述語

〔3〕〔4〕ともにPQの主体が別個である。

吉田（1994：93, 94）は「て」の用法を以下のように分類した。

〔1〕 動作の並列

前項・後項とも意志的動作または前項・後項とも無意志的動作の連続である。

（7）もし1億円あったら、家を建ててて車を買ってて外国旅行をする。（例文7～10吉田）

〔2〕 継起（順次動作）

二つ以上の動作を同一主体の行動として時間の順に並べたものである。述語は前項後項ともに意志的動作、またはともに無意志的動作になる。「それから」「あとで」で言い換えが可能である。

〔3〕 動作の側面

同一主体の同一時間における動作を意味の面で主と従に位置付けたもの。前項の動作の結果が残っている状態で後項の動作が行われる。「ながら」で置き換えが可能である。前項には動作性瞬間動詞または反復性の動詞が使われる。

（8）手を振って、友達を見送った。

〔4〕 手段

〔3〕のような文で前項がなければ後項が成り立たないという関係のもの。前項後項ともに意志的動作の述語が使われる。「そうすることによって」で言い換えることができる。

（9）一生懸命勉強して、いい大学に入ろう。

〔5〕 原因・理由

〔4〕の文で後項に意志性が認められないもの。「ので・から」で言い換えが可能である。

（10）一生懸命勉強して、いい大学に入ることができた。

吉田（1994）の「て」の分類は主体、述語の性質が整理されていてわかりやすい。言い換え表現が付加されており、分類を試みる場合に同様に考えることが可能である。しかし、〔4〕の「手段」がわかりにくい。

（11）一生懸命勉強して、いい大学に入った。（以下の例文の下線 筆者）

（11）のような例は「勉強という手段を使っていい大学に入った」と解釈し、「手段」とするのか、あるいは「勉強した。そして大学に入った」として「継起」と理解できるのか、区別しにくい。本稿では「手段」を「原因・理由」に含めて考える。

以上の先行研究を元に、本稿は「て」「と」を以下のように分類する。

「て」 継起・付帯状況・原因理由・並列

「と」 必然的な結果・継起・発見・時・前置き

「と」については、松田（1984）は「きっかけ」の意味があると述べているが、「継起」との区

別が難しいので、まとめて「継起」とした。また、前項が単に時を表現している例が見られたため、「時」という区分をたてた。「時」の例は以下のようである。

(12) 夜が訪れると、ウーパ・マリアノは帰っていった。(BCCWJ)

そして、実際の用例を集めてみたところ、前項と後項の間に明確な意味的なつながりのない「前置き」的な例が見られたので「前置き」という分類項目も立てた。

(13) 言われてみると、ここに辿り付くまでに（中略）十五年の月日経っていた。(BCCWJ)

松田（1984）吉田（1994）ともに前項と後項の主体が同一であるか否か、どのような動詞を使うかを記述している。これらに着目すれば学習者の誤用が防げるであろう。

しかし、「と」については、初級では文末がル形のは紹介されているが、文末がタ形のものについては取り上げられていないことが多い²⁾。文末がタ形の「と」について中級で教育する必要があろう。

「と」と「て」には共通の用法として「継起的な動作・作用」（以後「継起」とする）があり、継起を表すときには例文（5）（6）のように「て」と「と」を交代させることができる場合がある。継起以外の文を作るときには、それぞれ「て」あるいは「と」を使えばよい、と指示することにより、「と」と「て」を教えたことになるかと思われるが、実際には、ことはそれほど単純ではない。

森田（1975）は「て」について、継起・理由などの用法を挙げた後に、「て」は本来二つの叙述を結び合わせる役目しか持っておらず、二つの叙述の関係により、二義的にいくつかの用法がでてくるのであり、「て」自身にこれらの意味があるのではないと述べている。

学習者も上にあげた森田（1975）の「て」のとらえ方のように「て」を把握し、「て」は単にいくつかの叙述を結び合わせるものと理解している可能性がある。次の例は思い浮かんだ事柄を「て」で結合して語っている例と言えよう。

(14) S：そうですね、あの、すごくあの、公害、がありますので、空気が悪くな
ってきて、〈ええ〉それで、あの、日本のように、あのたくさん人達が電車に乗
って、もう少し、あの、あの、エネルギー、かからないんですね、(KYコーパス
EA01)

田代（1995）は中上級の学習者にストーリー性のある文章を作らせ、その文章を母語話者の文章と比べている。その中で中国語話者・韓国語話者ともに接続助詞については「て」の利用が日本語話者よりかなり多いという結果を発表している。

濱田（1984）は、ただ「と」や「て」の文を分類しただけでは学習者にとって有効な手助けとはならないと述べているが、その考えは教授法に取り入れなければならないと思う。

3 本稿の課題

「と」には必然的な結果、発見、継起などの用法があり、「て」にも継起、付帯状況などの用法がある。これらの多様な用法が「て」と「と」でどのように重なるのか、整理しよう。学習者の作る「て」の文のうち、どのような条件の文を「と」で表現しなければならないか、どんな時に

「て」を使っではいけないかを明らかにしたい。

「て」を訂正する場合、「たら」でも「と」でも可能な場合があるが、今回は「と」に集中するため「と」で代表させた。

4 テキスト中の「て」と「と」

野田（2005）の提起した、初級では「たら」を教えようという提案について考えよう。

森（2011）はBCCWJコアデータを用い、初級の文法項目の出現頻度を調査した。テキストのジャンルは「ヤフー知恵袋」「白書」「書籍」「新聞」である。それぞれのジャンルのコアデータの語数は10万語から36万語で合計は93万語である（p.58）。

表1 初級項目の出現頻度（森2011より作表）

	て		と		ば		たら		なら	
	出現数	割合	出現数	割合	出現数	割合	出現数	割合	出現数	割合
知恵袋	3,150	2.847%	361	0.326%	307	0.277%	288	0.26%	165	0.149%
白 書	5,341	2.336%	194	0.085%	87	0.038%	1	0%	20	0.009%
書 籍	7,349	3.133%	525	0.224%	602	0.257%	233	0.095%	153	0.065%
新 聞	6,344	1.758%	473	0.131%	380	0.195%	72	0.02%	72	0.02%
全 体	22,184	2.373%	1,553	0.166%	1,376	0.147%	584	0.062%	410	0.044%

「て」は非常に使用頻度が高い。それに対し、「と」「ば」はある程度出現しているが、「たら」は「と」「ば」に比べ全体としての出現頻度が低い。また、「たら」は「知恵袋」では「と」「ば」と同程度使われているが、「白書」「新聞」では使用頻度が非常に低い。つまり、「たら」は話し言葉的なテキストに偏って用いられる形であることがわかる。

江田・小西（2007）は小規模なデータではあるが「会話」「小説」「新書」を資料に初級文法項目の使用頻度を調べた。その結果（p.25）をもとに、図1のようにまとめると、「たら」は会話に偏るのに対し、「と」「ば」は満遍なくどのテキストでも高い頻度を示していることがわかる。

以上の調査結果から、野田（2005）の「たら」を教え、「と」「ば」は後回し、という主張には賛成しにくいと言える。初級のとらえ方の違いが関係するであろうが、学習者が会話だけでできればいいと希望するのであれば「たら」だけ教えるという方法

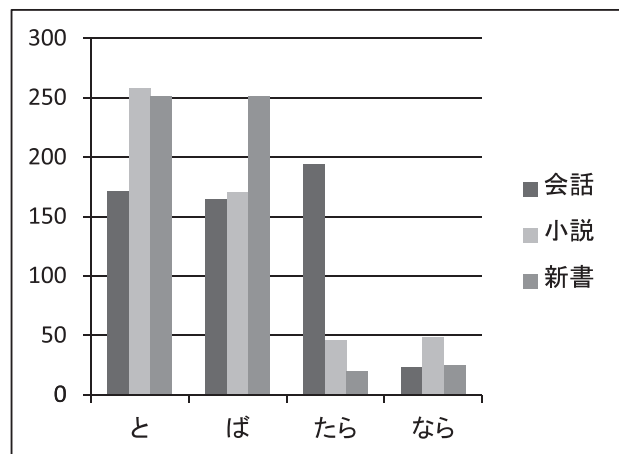


図1 会話・小説・新書における「と」「たら」「なら」「ば」

もあるが、初級から中級へ進む学習者には、「と」「ば」も教える方が適当と言える。

5 「て」と「と」の異同の整理

「て」と「と」を間違えずに使うよう指導する整理の方法を先行研究も用いながら考えていこう。

以下、例文をあげながら問題点を指摘する。金沢（2003）、そのほかの誤用例、KYコーパス、筆者の集めた誤用例などを使う。先行研究で誤用と表示されている例、筆者の語感で誤用と感じた例には×をつけて提示した。文脈によっては許容されるかもしれないと考えた例は？をつけて示した。

金沢（2003：15）は前項と後項の主語、「と」における後項の述語について以下の2点を示している。

a 前項後項における主語（主体）の関係

「て」同主語 「と」異主語

b 「と」後項における述語 「なる」「ある」「見える」などの自動詞・形容詞類

この主張はポイントを絞り、「て」は前項後項の主語が同一の時のみ使えるが、「と」は前項後項の主語が異なっている場合も使えること、「と」の文の後項の述語を「なる」「ある」「見える」などの自動詞や形容詞類にすることを提案し、記憶しやすい整理になっている。

しかし、金沢（2003）で誤用例を39例あげているが、それらの誤用例のすべてを上の説明では解決できないのではないかという疑問をもった。

本稿では「継起」「並列と継起」「必然的な結果」「発見」「時」と用法別に問題点を整理したいと考える。

5.1 「て」の継起の用法

〔1〕「て」継起 主語は同一 「と」継起 異主語可能

松田（1984）・吉田（1994）・金沢（2003）が指摘しているように、「て」の継起は前項と後項の主体は同一でなければならない。しかし、そのことは日本語教科書に十分反映されているとはいえない²⁾。

×(15) 私が電話をして、彼女はすぐに来てくれた。(中国)

(16) 私が電話すると、彼女はすぐに来てくれた。

×(17) 私がこの人と話した時、この人の瞳を見て、本当に動きが早かった。(例文金沢)

(18) 私がその人と話した時、その人の目を見ると、目は本当に動きが早かった。

(15) のように前項後項の主語が異なる場合は「て」ではなく「と」を使うようにすると正しい文になる。(17) のように、節によって主語が違っているような場合は自分の使っている主語が何であるか、注意して文を作っていく必要がある。学習者は継起であると考え、単純に「て」で結合しているのであろう。しかし、(17) は「私」が見て、「瞳」が動いた、と述べており、このような場合は「て」では結合できない。

(19) 使っていいかとたずねると、いいよと答えた。(作例)

？(20) 使っていいかとたずねて、いいよと答えた。

「たずねる」のが「私」で、答えるのが相手であるため、前項後項の主体は同一にはならない。そこで「て」ではなく「と」を使わなければならない。

このように主語が変わった場合、すぐに「て」ではなく「と」に切り替えるように学習者に理解してもらうためにはどのように授業を組み立てればいいのか、教師側は十分考える必要がある。

[2] 「て」の継起 前項後項ともに意志動詞、またはともに無意志動詞

「と」の継起 意志動詞と無意志動詞を一緒に使うことが可能

×(21) 左側の席に座って、隣の席に同じ大学から来た人がいました。(例文金沢) 意志
+ 無意志

(22) 左側の席に座ると、隣に同じ大学から来た人がいました。意志+無意志

(21) (22) は前項には意志動詞、後項には無意志動詞が使われている。このような組み合わせの時は (22) のように「と」で表現しなければならない。

対のある自動詞・他動詞では、自動詞は無意志動詞、他動詞は意志動詞になる。意志動詞・無意志動詞の関係は対のある動詞では自動詞と他動詞の問題になる場合がある。

×(23) 手を離して、ドアがしまった。他動詞+自動詞

(24) 手を離すと、ドアがしまった。他動詞+自動詞

(25) 手を離してドアをしめた。他動詞+他動詞

(26) 手が離れてドアがしまった。自動詞+自動詞

他動詞と自動詞を共に使う場合は「て」で結合すると (23) のように誤用となる。その場合は (24) のように「と」で結合するとよい。「て」を使いたいなら (25) (26) のように他動詞でそろえる、あるいは自動詞でそろえるようにしなければならない。

5.2 並列と継起

「て」の並列は前項後項の主語が異なっても成立する。しかし、並列の文を作るには、文脈から並列と理解できることが必要である。

(27) 私がテレビを見て、妹が本を読む。(作例)

×(28) 若い人が年をとった人に水をかけて、年をとった人は祈りをくださいます。(例文金沢)

(27) は前項と後項が同時に起こることが容易に想像できる。しかし、(28) は時間的な先後関係が感じられる。(28) のように時間的なずれが感じられる場合は「と」のほうが適当になる。

(29) 若い人が年をとった人に水をかけると年をとった人は祝福してくれます。

×(30) 香港の映画は日本で上映して、いろいろな製品や衣服が日本で売れます。(『日本語誤用例文小辞典』)

(30) は映画が上映され、その結果それに関係する製品が売れるという意味にとれ、時間的なずれを含んでいるので、「と」が適当である。

(31) 映画を上映すると、それに関係するいろいろな物が売れる。

学習者とは、並列のつもりで作った文が継起と理解される可能性はないか、確認する必要がある。

5.3 必然的な結果

学習者が「て」で接続する文のうち、必然的な結果と読める文がかなりある。

× (32) (車の運転は) あの、そうですね、あの、15歳からは、練習できますね、(中略)
それで、あの、クラスをとって、あの200ドルごろ、僕の州にかかりますが (KY
コーパスEA01)

(33) クラスをとると200ドルくらいかかりますが。

× (34) 複数の会社の内定をもらって、自分の希望の会社を選択できる。(韓国)

(35) 複数の会社の内定をもらうと、自分の希望の会社を選択できる。

(32) は「クラスをとると200ドルぐらいかかる」、(34) は「複数の内定をもらうと希望の会社を選択できる」と「必然的な結果」と理解できる内容である。他にも、

× (36) あの、日本のように、あのたくさん人達が電車に乗って、もう少し、あの、あの、
エネルギー、かからないんですね、(KYコーパスEA01)

(32) (34) (36) は「て」の「継起」の、前項後項ともに意思的な動詞を必要とする、という規則に違反したために正しい文とは認められない。このように意志的な動作動詞を結合するのではない文の場合は、「と」を使えば必然的な結果の文ができる。「と」によって結合された文は学習者の述べたい内容と大きな違いはないであろう。

(37) 多くの人が電車を使うとエネルギーがかからない。

上の例のように意志的な動詞同士の組み合わせでない場合は継起の「て」は使えないと教育してはどうであろう。

「て」は「～して、～する」と「する」ことだけを表すのに対し、「と」は「～すると～になる」と後項が変化や可能の形にもなる、と大づかみに理解させることを提案したい。

5.4 「と」の発見と「て」の原因・理由

高橋 (1985) は状態性述語の過去は根本に発見の意味があると述べている (p.289)。それは時と関わらず一定の状態を保つものを特別に過去で述べるということがその状態を発見したことを意味するためであるとしている。

江田 (2013:163–174) は「発見」の意味が現れる条件を、視点の変化が表現されている場合、変化が表現されている場合、意外性を表現している場合、感覚で感じたことを述べている場合、回想を表現している場合と述べている。

「と」の「発見」の文は前項が動作動詞、後項が状態性述語という文の構成になっている。学習者の作った「て」の文の中にもこの構成になっているものがあり、それらは「て」ではなく「と」で表現すると「発見」と読める。

× (38) しかしあんを多く入れて、かわがやぶけやすいです。(例文金沢)

(39) しかしあんを多く入れると、かわがやぶけやすいです。後項状態性述語

金沢 (2003) は、「と」の文での学習者の誤用を少なくするために、後項の動詞には他動詞ではなく「なる」「見える」などの自動詞を使うことを提案している (p.15)。

(40) あんを多く入れるとやぶけやすくなります。(必然)

「なる」を使うと必然的な結果 (40)、状態性述語を使うと「発見」(39) と解釈できる。

×(41) 30分くらい階段を上り続けて、やっと金毘羅宮が見えた。(例文41・43金沢)

(42) 30分くらい階段を上り続けると、やっと金毘羅宮が見えた。(発見)

×(43) 壁から向こうの山を見て、話の本にのった絵と同じ色の山でした。

(44) 向こうの山を見ると、話の本にのっていた絵と同じ色の山でした。(発見)

これらの文は前項に動作、後項に状態性述語が使われているため、発見の文にすると落ち着く。初級教科書での「発見」の「と」は多くが道案内の状況を使っている³⁾。しかし、状態性述語を使い、事態に気づくという意味の「発見」の文をもっと教育に入れる必要がある。江田(2013)から、例を以下に示す。

(45) 気がつくとう前三時、というような時間になっていた。

(46) 私が(中略)ふろしき包みをかかえて叔父の家に帰ると、大阪の(中略)父の兄が訪れて、私を待っていた。(例文45・46江田2013)

5.5 「て」の原因・理由と「と」の必然的な結果、発見

吉田(1994)、松田(1984)は「て」の原因・理由の表現は後項に無意志的な述語を使う形と説明している。「と」の発見は後項の述語が状態性述語であり、無意志的な述語であるため、「て」の原因・理由と「と」の「発見」の文の相違を整理しておこうと考える。

吉田(1984:102)は「て」が原因・理由という役割を果たすためには以下の制約が必要と述べている。

(1) 後項の動詞は意志を示す文末は使えない。

(2) (1)を満たす場合は①前項・後項の動作主が一致しているか、②前項動作・事態が因果性の強いものであるか、③結果の受け手の視点が前項の構文に組み込まれているか、いずれかでなければならない。

(3) 但し、後項に話し手(=動作主)の感情を直接示す述語がある場合は「ので」「から」より「て」を使う方が効果がある。

学習者が因果関係があると考えて「て」を使う場合は問題がないが、その意図がないのに原因理由の「て」の誤用であるように見えてしまう場合がある。金沢(2003)のあげた例の中にも見られる。

(47) しかし、教室に入って、練習の紙をもらって、皆の顔に同じ緊張が見えてきました。

(48) 練習の紙をもらうと、皆の顔に緊張が見えてきた。(原因・理由)

(49) 私はどうしても、親から決められたルールの中に閉じ込められている子供を見て、腹が立つ。(例文47・49金沢2003)

(50) 親から決められたルールの中に閉じ込められた子供を見ると、腹が立つ。

『みんなの日本語』の「て」の原因・理由を学ぶ39課では以下のように文型および例文が提示されている(p.115)。

練習B

- 1 意志動詞+感情 母の元気な声を聞いて安心しました。
- 2 無意志動詞+感情 旅行に行けなくて残念です。

3 状態性述語 + 可能表現 質問が難しく、答えられませんでした。

4 状態性述語（名詞） + 無意志動詞 火事でお寺が焼けました。

これらの文を「と」に置き換えることが可能か、可能であるなら、どのような意味になるかを検討してみよう。文末がル形の場合は「と」での置き換えが可能なので、文末がタ形の場合に限って検討する。

1 意志動詞 + 感情

(51) 母の元気な声を聞いて安心しました。(例文51・53・56・59『みんなの日本語』)

? (52) 母の元気な声を聞くと、安心しました。

2 無意志動詞 + 感情

(53) 旅行に行けなくて、残念でした。

× (54) 旅行に行けないと、残念でした。

「と」で文末がタ形の場合は継起の文になるが、継起の文は外側から観察した事態の継起を描写する表現でなければならない(久野1973)ということが明らかになっている。後項に感情を用いた文は、話者の感情である場合は上の制約に違反するため、文として成立しにくい。他者の感情の表出を描写する文であれば継起の文として成立する。

(55) お母さんの元気な声を聞くと、弟は安心した表情を見せた。

3 状態性述語 + 可能表現

(56) 質問が難しく、答えられませんでした。

× (57) 質問が難しいと、答えられませんでした。

(57) のように「と」にした場合は不適当な文になる。あるいは過去の繰り返しとしてなら成立する。しかし、これも外側から描写する文にすれば許容量が増す。

(58) 質問が難しいと、大多数の人は答えられませんでした。

4 状態性述語（名詞） + 無意志動詞

(59) 事故で人が大勢死にしました。

× (60) 事故だと人が大勢死にしました。

(59) のように因果関係が明確な場合は原因・理由としては理解できる。この文を「と」にした場合は、文末がル形であれば必然的な結果の文が成立する可能性があるが、文末がタ形の場合は継起としても理解不可能になる。

「て」の原因・理由の用法は後項が無意志表現である。感情・可能・自動詞表現などが使われる。文末がル形の場合は「と」に置き換えた場合、必然的な結果の意味が表現される場合がある。文末がタ形の場合は、外側からの事態の描写としてなら置き換えが可能な場合がある。

「と」の発見の用法との関係は、「発見」の文では意外性が表現されるため、因果関係が明確に示されている文は「発見」に置き換えができない。

5.6 時

従来あまり注目されてこなかったが、「と」には「時」を示す例が見られる。今回の小調査でも少しある。金沢(2003)の例文中にも39例中に5例見られた。

× (61) それを守って、ラマダンが終わって、ハリラヤがきます。(例文61・62金沢)

×(62) 12時になって、花竹につけて、みんな「あけましておめでとうございます」と言います。

上の例はそれぞれ、

(63) ラマダンが終わると、ハリラヤがきます。

(64) 12時になると、「あけましておめでとうございます」と言います。

にすると適当な文になる。時の「と」についても注目してよいであろう。

6 まとめ

以上検討してきたことを見やすいように箇条書きで整理する。

・「て」の用法と「と」の用法

「て」 継起・並列・付帯状況・原因理由

「と」 継起・必然的な結果・発見・時・前置き

「て」と「と」に共通の継起の用法があるため、誤用が起きやすい。

・「て」の継起 前項後項の主語同一

動詞は意志的動詞の結合または無意志的動詞の結合

「と」の継起 前項後項の主語は同一主語も異主語も可能

動詞は意志動詞と無意志動詞を共に使うことが可能

・並列の「て」 異主語が可能

前項と後項の間に時間的な差が感じられる場合は並列と理解できないため、「と」が適当

・発見の「と」 前項の述語は動作性、後項の述語は状態性

意外という意識が表現される

・原因理由の「て」 後項の述語は意志を含まないもの

感情・可能表現・自動詞など

因果関係があるもの

このように整理することで多少は誤用が防げることを期待したい。

注

- 1) 『みんなの日本語』『大地』などがそのようになっている。
- 2) 『みんなの日本語』『大地』では文末がル形の例だけがあげられている。
- 3) 『みんなの日本語教師用指導書』『大地文法説明書』には「て」の制限は記載されていない。
- 4) 『みんなの日本語』23課、『大地』23課。

参考文献

- 金沢裕之 (2003) 「日本語教育における「～と」接続文の位置付けについて」『日本學報』韓国日本學會
久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館
江田すみれ・小西円 (2007) 「3種類のコーパスを用いた3級4級文法項目の使用頻度調査とその考察」
『日本女子大学 紀要 文学部』第57号

- 江田すみれ (2013) 『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト』 くろしお出版
- 高橋太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』 秀英出版
- 田代ひとみ (1995) 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点—不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる—」 『日本語教育』 85号
- 仁田義雄 (1995) 「テ形接続をめぐって」 『複文の研究』 くろしお出版
- 野田尚史 (2005) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』 くろしお出版
- 濱田留美 (1984) 「接続の「と」と「て」の間」 『国際学会友会日本語学校紀要』 第4号
- 松田剛史 (1984) 「「ト・テ・タラ」について」 『大谷女子大國文』 14号
- 森篤嗣 (2011) 「『現代日本書き言葉均衡コーパス』 コアデータにおける初級文法項目の出現頻度」 森篤嗣・庵功雄 『日本語教育文法のための多様なアプローチ』 ひつじ書房
- 森田良行 (1975) 「複文の文型練習—「たら」「て」を含む文型を中心に—」 『講座日本語教育』 早稲田大学
- 吉田妙子 (1994) 「台湾人学習者における「て」形接続の誤用例分析—「原因・理由」の用法の誤用を焦点として—」 『日本語教育』 84号

資料

- 李在鎬 (2009) 「タグ付きKYコーパス」 <http://jhlee.sakura.ne.jp/kyc/corpus/>
- 国立国語研究所 (2007) 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」 http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/
- 市川保子 (1997) 『日本語誤用例文小辞典』 凡人社

使用教科書

- 『みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ』 (2012) スリーエーネットワーク
- 『みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ 第2版 翻訳・文法解説』 (2012) スリーエーネットワーク
- 山崎佳子他 (2009) 『日本語初級大地』 1、2 スリーエーネットワーク
- 山崎佳子他 (2009) 『日本語初級大地 教師用ガイド』 1、2 スリーエーネットワーク